J. Jpn. Soc. Soil Phys.
土壌の物理性
No. 93, p. 67（2003）

21 世紀水危機　農からの発想

山崎農業研究所編　農文協　2003 年発行
A5 版　350 ページ　ISBN4-540-02153-2　定価 3,900 円

農業を行っていくうえには遺伝資源である植物と自然資源である土・水が不可欠である。遺伝資源とは異なり，植物を育てる土水資源には上限が存在する。「土の危機」については，カーターとディールの「土と文明」をはじめ今までに多くの警鐘が出され，その大切さは教科書にも記述されるように比較的知られている。「水の危機」については Hillel の “Out of the Earth” に強調されており，サンドラ・ポステルの「水不足が世界を脅かす」により広く知られるようになってきた。これらの本では水の量と質の不足と不適切な配分についての「危機」が強調されている。これに対し，本書の危機は，「農業用水に市場メカニズムを導入すべき」という一部外国の主張が世界の主流になると大量に水を使う水田農業は壊滅的な影響を受けることになるという「危機」である。本書の発行が第 3 回世界水フォーラムの時期に合わせているのはこのためである。

本書では，はじめに農業・農村と水という特別寄稿文においてコモンズの考え方が紹介され，農業用水はどのように考えるべきかの視点を与えている。ついで，以下の章立てで 28 名の執筆者が水田農業と水の関係についてはこのように考えるべきであるという主張を過去そして現在を見ながら，様々な視点で展開している。

Ⅰ　世界・アジア・日本の水はいま
Ⅱ　農業・農村が水をはぐくむ
Ⅲ　日本の水危機を考える
Ⅳ　水との新しいかかわり方のために

多くの執筆者からなる本書の内容を要約することは難しいので，一部を紹介する。

農業が生産機能ばかりでなく多面的機能を持つことが知れわたってくるにつれ，農業水利施設は多面的機能の発揮に貢献しているのであるから，その維持管理は費用を含めそこに住む住民が負担すべきだという主張を行政サイドから良く耳にする。このように一方的にみえる考えかたがどうして出てくるのかは，土地改良区の問題から出発している。水田の水使用量は我が国の総使用量の 65% を占めるが，用水の反復利用により水田の消費水量は使用量の半分ぐらいである。水田は畑よりも水使用量が多く，しばしば水の無駄使いとして欧米の批判を浴びるが，人口扶養力から見ると水田の方が有利である。この約 30 年間で水田耕作面積は 140 万 ha も減少しているのに水使用量は以前より増大し，単位面積当たりの水使用量は 85% も増大し，非効率的になっており，このままでは多面的機能の維持向上に多くの負担がかかってしまう。「桃太郎」と生活文化としての水利用の歴史。

水質汚染や多面的機能の喪失は生産効率を重視した農業を展開したために生じたのであるが，この点をもっと鮮明に反省，総括すれば，農からの主張がより理解されるだろう。また，過疎化した農村部では清流を戻すことは可能であるかもしれないが，自給率が 40% の我が国では，国土全体を見た場合には水は決してきれいにならないと土の側からは考える。農業の持つ多面的機能の場合は畑に比べて水田農業の優位性が強調され，本書でも水田農業にのみ焦点を当てている。食糧自給率の面からは畑作物の自給率の向上が不可欠であるが，畑作農業に関する水危機は存在しないのか。このように考えるのは，田よりも畑が優勢な北海道にいるからかも知れないが。

長谷川周一（北海道大学農学研究科）